



幼児研究の進め方

澁谷 鶯谷 さくら 幼稚園

松 村 康 平

問題

相手はうら若い保母で、私は大學生であつた。大東亞戦争の始まる頃で、今日のようには何かとフランクに話し合えなかつた、そのせいもあつたのだろうが、私はこの保母から、とかく子どもをかばう氣持が子どもの正しい理解のさまたげになることを、強く感じさせられたものである。保母は保母で、私から、子どもを科學的に観ることの冷たさを、感じていたかも知れない。しかし、お互に打明けて、納得のいくまで話し合うことをしなかつたので、今以てその保母と私との間では未解決のままなのだが、考えてみると、こうした氣持或は意見の相違は、必ずしも私たちだけにかかわりのあるものではないように思われてくる。

かばう氣持

その保母は二十歳位であつたろうか。初めて會つて直ぐには、身なりとか、顔だちとか、歳だとかの感じより

も、「ご苦勞さま」と言いたい氣持が先に來る程に、忙しそうであつた。喧嘩をしている二人の子どもを前に、とめ役をしながら、左手に泣く子を抱いて、遠くからこれも争いの起りかけで訴えてくるのにこたえつつ、「一遍にでないといふですけれど」と言う。それが初對面の挨拶より先だつた。私の訪問する機会がふえ、顔を合わす回数が増すにつれ、種々な問題を取りあけて話すようにはなつたが、例えば、「この子はどういふ性質ですか」と訊ねてみる。その子の性質を、いろいろな角度から論じることとはしないで、自分によいと思える性質を多くあげていく。「他の子をよく泣かしはしますけれど、すぐあやまりますし、根は素直な子です」と、そう答えたりする時は、根が素直だと思ふ氣持で、泣かすという事實を、打ち消そうとしていく。こういう場合に、「他の子をよく泣かすのですか」と念を押してみよう。「ええ」といふ答は得られず、「ええ、ですけれど」といふ答が得ら

れるに相違ない。かばう氣持を引き離してなど、子どものことを語れない。殊にこの保母はそういうたちのひとだつた。顔を紅潮させて、ただならぬ氣配を眉宇にみせる。餘りにも鋭い情愛の前に氣おされてくる。確かに美しい氣品が感ぜられた。けれども、私は、そういう時、私が心理學を目指して入學した當時の心境を想い起すのだつた。そうして、この保母が歩んでいるとは別な道のあることを思うのであつた。

科學のメス

入學當時といつても、心理學的な訓練にそろそろ慣れ始めようとしていた頃である。心理學の對象は、主として人間であり、而も心理學の進路が實驗に委ねられていくという、このことを入學前にも知らなかつた譯ではなかつたが、それが今は生きた自分の問題であつた。このことに加えて、自分自身に、これ丈はと思える感情、これ丈はソツとして置きたいと思える美しいもの・聖いものをも、分析しなければならぬ苦痛があつた。

心の奥にソツとして置きたいもの、それを科學のメスによつて切らなければならぬ。この苦痛を私は出来ることなら避けたかつた。けれど、少くとも心理學に携わろうとするからには、この苦しみを超えなければならぬ。この苦しみからの逃避は、心理學への訣別である。聖くて美しく、ソツとして置きたい心の奥をも分析しなければならぬ。そこに苦痛の體驗がなされることは當然ながら、當然だからといつて、その苦痛に負けてしまつてはならなかつた。そうして、この苦痛を乗り越え進むときに、苦痛も本當に生きてくる。苦痛が眞に正しかつたか、その意味も乗り越えることによつて分るのだと、これが私に納得出来るまでには、更に多くの時間と勇氣が必要だつたけれども、私はこうしてとにかく、科學的に生きる道を歩み始め、僅かながらもその喜びに觸れることが出来るようになった。

二

問題

かばう氣持は、事實のありのままの姿を曇らせる。事實を受け容れるためには、勇氣の必要であることを、私たちは知つた。科學的に生きる道にも苦痛が伴う。私たちは、また、誠實であり、謙遜でなければならぬ。このように列擧していくと、科學的な態度のただならぬものが感じられ二の足を踏むことになるだろうか。苦痛を乗り越えて進んだところで、大した成果も期待出来ない。美しいものを美しいと感じるよりも、美しく感じるのはどうしてかと考える。そうして、ひからびた冷たい人になつていくなんて、私はいやだと思ふ人も出て來よう。科學的に生きていることが冷たい人間をつくるのだつたら、私だつていやだ。しかし、果してどうなるのだろうか。

冷たい印象

リラダンという人がサンティマンタリズムという作品を書いている。それは、或る春の宵のこと、教養の高い二人の若人が、シャン・ゼリゼの並樹路

の大本の葉蔭に腰をおろしていた。その一人、リュシエンヌ・エメリイは、未亡人で、その顔は大大理石の蒼白さを帯びていた。他の一人、マクシミリアンは、鬼才のある詩人。彼は容姿端麗、その眼は叡智の光を宿し、魅力に充ちていた。けれど、寶石のように、多少冷然としていた。エメリイ夫人は優しくその戀人の手をとつて語る。「こんなふうには思われなくていいから。つまり、人工的で、いわば抽象的な印象に絶えず動かされる結果、偉大な藝術家たち、たとえばあなたのような方は、運命に與えられた苦惱や快樂を、ありのままに受け容れる能力を鈍くしてしまうのではないだろうか。或る幸福か、大きな不幸に襲われた場合、あなた方が未だその事件をよく理解もなさらぬ前に、この事件をどうしたらよいか、ここではどのように振舞うのが適切かと思ひ、非凡な俳優を探しに行きたい欲望にとらわれるのではないでしようか。それで、「藝術』は人をかたくなにするような氣がして

私には不安に思われますの」、と夫人が言う。これに答えて、マクシミリアンは、或る歌手の話をする。その歌手は、婚約者に死別した。その死の床の傍らで、婚約者の妹が痙攣的にむせび泣いている。歌手は、そこに發聲法上の誤謬を認めた。そうして、それをもつと迫力あるものにするには、どうしたらよいか、そのための練習のことを考えていた。これをリュシエンヌ、あなたはいけなとお考えですか？ マクシミリアンはエメリイ夫人にこうたずねてから、この歌手が婚約者に死別した、その悲しみのために自分もまた死んだ話をする。婚約者の妹はあれほどに泣いていたけれど、きまりの日が過ぎると喪服を捨ててしまつた。このような會話がエメリイ夫人とマクシミリアンの間に取り交わされる。夫人は、藝術家の激しい感受性が、必ずしもそのまま外には現わされなことを知る。しかし、エメリイ夫人も、語りながら、夫人がド・ロスタンジュという青年とのあいびきの約束を話題にの

せたときマクシミリアンが受けた動搖には氣つき得なかつた。青年の車に占めたリュシエンヌが、マクシミリアンに接吻を送る。マクシミリアンは、暫くの間眼で車の後を追つていた。それから、徒歩で歸宅した。部屋の中にひとりになると、彼は仕事机の前にすわり、道具ばこの中から小さなやすりを取り出し、爪のさきを磨いていた。彼は爪を磨くことに夢中になつてゐるようであつた。次に彼は詩を書いた。それはスコットランドの谿間に關するものだつた。それから、次に、新しい書物の頁をきり、二三頁に眼を通し、本を投げつけた。夜の二時が鳴つた。彼は手足を伸ばした。いやに胸騒ぎがするな！ と彼は呟いた。彼は起き上り、窓掛と黒幕をおろし、仕事机のひき出から小型のピストルを取り出し、ソファに近づき、ピストルを胸に當てて微笑し、兩眼を閉じながら肩をそびやかした。鈍い銃聲が響き、青味がかつた一抹の煙が、クッサンの上に倒れたマクシミリアンの胸から立つてい

る。そのことがあつてから、エメリイ夫人は、慕い寄る男たちに快活な口調で、夫人が黒のよそおいをしている理由を、でも、黒は私によく似合うんですもの、と答えはしていたが、その時、喪の扇は、彼女の胸の上に、さながら墓石の上の黒胡蝶のつばさのように戦きふるえていたという。

ここに述べられているのは、藝術家の場合である。けれども、私は、ここに、科學的にものを観る態度との類似を見出して、この引用を企てた。冷たく横わつているマクシミリアンの體から、今もなお、あたたかい心の響が感じられるようである。

三

問題

私たちは、道を間違えないようにしなければならぬ。感じる心を鈍らせたり、あたたかい氣持を失うのは、科學的に生きることの邪道である。しかし、このように氣を配り科學的な態度

を身につけて、果してどれだけの成果があるだろうか。

幼児の研究

もう少し年齢の進んだ兒童期の子どもたちについては、いろいろと研究法が論じられたり、研究結果が發表されたりしている。それに比べて、幼兒研究法や研究結果の發表はそれ程盛には行われていない。その原因はどこにあるのだろうか。

幼兒の研究がむずかしいためだろうか。幼兒研究者が少いためだろうか。幼兒期が兒童期に比べて短いためだろうか。この何れをも原因の中に數えることが出来るであらう。けれど、どうして幼兒の研究がむずかしいのだろうか。

兒童の研究で幅をきかしている方法に、質問紙法 (Questionnaire) というのがある。紙に問題を書いて、それに筆答してもらふ。この方法は手輕で、澤山の子どもについて一ぺんに研究を進めることが出来る。兒童研究の結果の中には、この方法によつたものが大

變多い。けれども、幼兒についてはこの方法を用いることが出来ない。研究も、目的が社會的な影響とか集團の動きを研究しようとするならばとにかく、そうでない場合は、個人的に進めなければならぬ。それだから研究の成果を一ぺんにあげることが出来ない。このようなハンディキャップが、幼兒の研究を量的に少くしていると考えられる。けれど、幼兒の研究が少ないのは、研究の困難な原因がなお他にあらためてはないだろうか。

研究のプランを立てて幼兒たちに向つても、今度は自分の番だと言ひ張つて、どうしてもきかない子どもが出来た。時には、一人ずつやらせようとしても、ぞろぞろついてきて、その中の三四人が一しよに部屋へはいる。時には泣き出しそうになる子もいて實驗室にはいるのを嫌う。そんな時は、順序をおくらせている。すると何時の間にか自分から進んで来るようになったりする。そうしなければもう大丈夫なのだが、實驗室におすおすとはいつて来る

子どもについては、實驗を通して絶えず氣を遣わねばならず、中途で止めねばならない場合も出てくる。殆どの子どもが、實驗後反つて側へついて来るようなら、先ず安心ではあるけれど、そうするためには、その日のプランをくずし、子どもたちと遊ぶことも必要であるし、實驗に臨ませ實驗を續けていくための苦勞は並々でない。このようなことが幼児の研究を困難にしているのであろう。しかし、更にこのような苦勞や努力をしたところで大した成果もあがらないだろうという懷疑的な考えのことを、注意しなければならぬ。

幼児たちは、はたの影響を受け易い。實驗をすることは出来ても、その時には本來の姿が失われてしまつていく。それだから、得られる結果に信頼がおけないという。この主張には確かに一理がある。けれども實驗者を實驗條件に加えて考えることにより、この不都合な點は、除くことが出来はしないだろうか。つまり、實驗者の影響を

見落さず、これこれの實驗場面ではこれこれの反應を示すというような、場面に即した理解の仕方をしていくことによつて解決出来るのではないかと思われる。

なお、これとは違つて、幼児たちを實驗したりテストするのは可哀相だという氣持を抱く人がいるかも知れない。實驗やテストでは、品物のように子どもたちを取り扱ふと考へ、實驗とがテストとかをこわいものであるように思つてゐる。事實、科學的な觀方では、眺める立場をとるから、多かれ少かれ物を見ると共通な點が出てくる。けれども、實驗の適否は、その仕方の如何にかかつてゐるのではないだろうか。子どもたちは喜んで實驗に臨み、中には、二度も三度も實驗をしてもらいたがる子どもが出てくる。單なる興味から實驗を行うのは好ましくないけれど、それが、より正しい理解、よりよい保育に役立たせたいという善意によつて導かれてゐるとき、實驗やテストそれ自身の成果如何は別にしても、

その試みを許すことが出来るのではないだろうか。固より、實驗やテストのように、とかく強制的な性質を持ち易いものが保育の大半を占めたりしては好ましくないから、これを試みるに當つては萬全を期すべきであるけれども、保育界の現状では、寧ろ、少しの失敗を恐れるよりは、進んで試みる必要なのではないかと思われる。このような、正しい理解、それに基くよりよい保育への情熱が、科學的な生活の下地をつくることに役立つのではないだろうか。「幼児の教育」にも、このような情熱の成果・研究の試み・そしてやがては優れた研究結果が、數多くのせられていくことを、私は期待している。

「附記」リラダンの作品については、齊藤磯雄譯・殘酷物語を參考にした。藝術的な觀方と科學的な觀方については山下俊郎先生が本誌四十六卷の五號に、述べておられる。